

食事が終わると、ピートは昼寝すると言って、寝室に引き上げていった。わたしも休みたいがとても昼寝などできそうもない。市長が命令を出したかもしれないが、緊急避難の必要もなさそうだったので、朝から起こったことをまとめておこうと思ひ、テレビの前でメモをつけ始めた。

トレード・センターはまだ勢いに乗って燃えつづけている。ウエスト・ストリート（世界金融センター）の西側に広がるワールド・ファイナンシャル・センター（ハドソン河の展望が利く超近代的なひとつの都市になっている。ファイナンシャル・センターのいくつかの高層ビル群の北には、最近、「ワシントン・マーケット・パーク」という公園が完成した。公園のなかの、ハドソン河に沿って続く遊歩道からは、対岸のニュージャージーが手に取るように見え、南西の方向には自由の女神を仰ぐこともできる。遊歩道の内側には広い芝生が広がり、サッカー場やバスケット・コートもある。

チャーチ・ストリート一四九番地に住んでいた頃、わたしは夕方になると愛犬ガボを連れてあの公園を目指した。チェンバーズ・ストリートの脇には英才教育で名高いスタイバサント高校の真新しい校舎がある。理数系の秀才を集めた公立高校で、数年前に取材した時には、生徒の五十五パーセントがアジア系だった。中国系、韓国系ばかりでなく、インド系、パキスタン系などさまざまな国から集まった生徒は、自由な雰囲気（自由な雰囲気）の少人数のクラスで授業を受けていた。

スタイバサント高校の横から遊歩道に入り南へ進むうち、マジックアワーと呼ばれる日没直前の時間帯になる。川の水面が輝き、広い芝生の緑が輝き、そこで遊ぶ子供たちが輝き、すべてが生（生）の喜びを発するあの魔術的な数分間。その日最後の太陽の競演とでも呼ぶにふさわしいほど神秘的な体験である。光が薄れてくると、対岸のニュージャージーにオレンジ色の巨大な太陽が静かに沈んでいく。

「ガボちゃん、本当に綺麗ね」

わたしは黒いラブラドル犬に声をかけ、彼がうなずくと帰路につくのだった。

あるいは、「ワシントン・マーケット・パーク」を抜け、ファイナンシャル・センターの真新しいビル群を左手に見ながら、川辺に繋がれた大小さまざまなヨットを眺めることもあった。その先には、高級アパートが建ち並ぶ「バツテリー・パークシテイ」というコミュニティがある。すべてが真新しく近代的で、古臭いニューヨークの喧騒からはおよそかけ離れた別天地。そして河と反対の東側には、いつもあの世界貿易センタービルが、夕日を全身に受け、ステイールの外壁を金色に輝かせながら、世界を睥睨（へいげい）するかのよう（かのように）に巨体を現していたのである。

「ワールド・トレード・センター七号館が崩れ落ちようとしています」

キャスターの声に驚いて画面を見ると、四十七階建てのビルが崩壊していた。北タワーの北側に建っていた近代的なビルである。火勢はワールド・ファイナンシャル・センターにも及びそうだという。

その時、電話が鳴ったので取り上げると、下の階に住むスーザンからだった。「アパートはどうなっている？」

この事態でも元気そうな声である。電気、水道、ガスなどすべて問題なしと伝えると、安堵したような声で十四丁目の閉鎖ラインで止められて帰ってこられない、という。三階の住人は共働きのカップル。ふたりとも朝早く出勤してしまうから、貿易センタービルの爆破、崩壊時にはオフィスにいたに違いない。

「ついに始まったようだ！」

昼寝していると思っていたピートの声があった。テレビの前に駆けつけると、アフガニスタンからの中継で、CNNのリポーターが背後の夜空に赤く燃えるカブール市内の様子を伝えていた。米国がついに報復爆撃を始めたように見える。アフガニスタンとの戦争がついに始まってしまったのか。あの旧ソ連軍ですら、一九七九年の戦争開始いらい苦戦を強いられ、結局は撤退したというのに。旧ソ連軍の大敗が共産主義国ソ連に楔を打ち込み、ひいてはベルリンの壁崩壊に繋がったのではないか。しかし、あの新しいホワイトハウスの主人なら、深い考えもなく、平気でそれくらい馬鹿げた戦争を始めたのかもしれない。

「アフガニスタンでは内戦が続いています。これはアメリカ軍のミサイル攻撃ではなく、内戦のようにも見えます」

CNNのリポーターがこう伝えた。しばらくしてアトランタのCNN本部のキャスターが、米国防総省はアフガニスタンへの攻撃など行っていないというコメントを発表しました、と報道した。アフガニスタンでの戦火が米軍のミサイル攻撃ではないと聞いて、どれほどほっとしたのか。

*テロリストは闘争心を燃やした

テレビでは司法長官ジョン・アシュクロフトの記者会見の模様を中継し始めた。「本日、アメリカはわが国土の上で最も大きな悲劇のひとつを経験しました。この憎むべき暴力行為は、われわれ国家の安全に対する攻撃であります。犯人たちは国家の安全とすべてのアメリカ市民の自由を攻撃してきたのであります。われわれはこのような行為を断じて許すことはできない」

明日にも戦争に突入しそうな強い言葉である。行方不明だった大統領がヘリコプターでホワイトハウスの庭に降り立つ映像が流れる。

「グッドイブニング」

こう言って、大統領がオーバルオフィスから国民に向けてのテレビ演説を始め

たのは、午後8時30分。

「本日、われわれアメリカ国民、われわれの生活、われわれの自由は、テロリストの周到な一連の行動によって攻撃されました。……数千人の命が悪魔の手によって突然失われたのです」

ルイジアナ州バークスデール空軍基地を発ったエア・フォース・ワンは、ネブラスカ州オマハにあるオフトト空軍基地へ向かったという。オフトト空軍基地は米国が核攻撃を行うときのコマンドポストであり、米国でもっとも安全な軍事基地のひとつという。ブッシュは飛行中にもディック・チェイニー副大統領やドナルド・ラムズフェルド国防長官と電話で連絡、オフトト基地では国家安全保障チームと電話会談を行ったという。しかし、長い一日の後、ホワイトハウスの執務室からテレビ演説を始めた大統領の顔は引きつり、怯え、さらに悪いことに、また、誰かが書いた原稿を棒読みしている。

「ちよつと外を見てくる」

と云ってピートが出かけた後、わたしは仕事部屋のコンピュータに電源を入れ、Eメールを開けてみた。朝11時26分に送った「ウォー・ゾーンからの速報」メールへの返事がもう届いている。

「何はともあれお二人がご無事とのこと安心しました。昨年あなたとこれからのアメリカの話をしたことを即座に思い出しました。最近のイスラエルとパレスチナ問題に対するブッシュの対応の仕方を見ながら、大きな問題が起きなければと心配しておりました。米国の報復処置は当然でしょうが、軍事的なやり方はブッシュの地域的経済的利益に繋がるわけですし、又これを米国経済の建て直しに利用されるとしたら、複雑な気持です。

どうぞこれからお気を付け下さい。早速のご連絡有り難う御座いました。ピート氏にも宜しくお伝え下さい」

このメールを送ってくれたのは、東京のAP通信「ワイドワールドフォトズ」ディレクターの今城力夫さんである。さすがに通信社の写真部は徹夜でこの大事件の報道に追われているのだろう。多忙ななか送ってくださった返信メールに心から励まされる思いだった。

処女作『ライカでグッドバイカメラマン沢田教一が撃たれた日』の取材で、当時、UPI通信社写真部にいた今城さんを訪ね、インタビューしたのはもう二十二年前になる。彼は沢田カメラマンの同僚で、この本の核になる貴重な証言をいただいた。

「昨年あなたとこれからのアメリカについて話したことを思い出しました」とメールにあるのは、大統領選挙直後の昨年十一月十四日、ニューヨークを訪ねてきた今城夫妻と久しぶりにゆつくりチャイナタウンで夕食を一緒にした時のことだった。

十一月七日の大統領選挙は、共和党の大統領候補ジョージ・ブッシュと民主党の大統領候補アル・ゴアの歴史的大接戦が続き、フロリダ州の集計について訴訟合戦にもつれこんでいた。

あの時、もし、ジョージ・ブッシュが大統領に就任したら、父親ブッシュ時代の「湾岸戦争」に続く「戦争」に突入するだろう、といつになく熱弁をふるってしまった。今城さんも同意見で大いに話はずんだのである。オイルマネーで巨万の富を築いたブッシュ親子が中東で紛争を引き起こし、それによってさらに経済的基盤を固めるだろう、とも力説したのである。

その後、一般投票では五十四万票の差で負けていたのに奇跡的にホワイトハウス入りしたブッシュ大統領の閣僚の顔ぶれを見てみると、半数近くは父親ブッシュに仕えた人物である。チェイニー副大統領、パウエル国務長官、ライス大統領補佐官など。テロリストはその顔ぶれを見て、闘争心をますます燃え上がらせたに違いない。配役は揃った、あとは実行あるのみだと。

*わたしは何があっても生き延びます

わたしは早速、「ウォー・ゾーンからの速報2」をすべての友人に送ることにした。

「9月11日8・53PM送信

From War Zone 2

速報2

世界貿易センタービルの北タワーがアメリカン航空11便の衝突によって爆破してから、ようやく12時間近くがたとうとしています。

わが家では現場に急行する救急車のサイレンがまだ聞こえますが、テレビ・ニュースなどで状況がつかめてきたので大分落ち着きました。時間順に追うと、次のような状況だったようです。

1. 朝8・48、ハイジャックされたアメリカン航空11便（ボストン発）がWTC北タワーに衝突して爆発。

2. 9・3、二機目のハイジャックされたユナイテッド175便がWTC南タワーに突っ込み、爆発。

3. 9・45、ワシントンDCのペンタゴンにアメリカン航空77便が突っ込み爆発。

4. 9・55、WTC南タワーの火災が起こっている上階が新たに大きく爆発して、文字通り、崩壊。

5. 時間不明だが、国務省の外で爆弾を積んだクルマが爆発（筆者注・これは

誤報だった)。

6. ペンシルベニアの西、ピッツバーグで大型航空機が墜落(筆者注・ニュージャーシー州ニューアーク飛行場を発ったユナイテッド航空93便がハイジャックされ、10・10に墜落)。

7. 10・28 a m、WTCの北タワーが爆発、崩壊。

8. その後、夕方の5・25 p mには火災を起こしていたWTC7号館(47階)が崩壊。

一連の爆発は、周到に用意された恐るべきテロでした。こちらの6時頃、アフガニスタンのカブールで爆発が起こっていることが報道され、アメリカの報復が始まったか、という第一報でしたが、どうも間違いのようでした。オサマ・ビンラディンも犯行を否定しているので、一体、誰の仕業かまだ全くわかりません。

わたしの家のまわり、特にキャナル・ストリートから南には北から入ることができません。つまり、ここを出て行けば明日も帰れそうもない、ということですが、わが家はまだすべて大丈夫。今夜はここに籠城して、一体、何が起こったか、この先何が起こるのか、しつかり見極めるつもりです。

WTCタワーが爆発し、煙を吐いて落下物などを落としていくあの瞬間が未だ目から消えません。あれほど恐ろしい経験をしたのは初めて。以上、速報ですので多少の間違いなどあるかもしれませんが。初めの速報に返事くださった皆さん、本当にありがとうございます！ 私は何があっても生き延びます」

ピートは一時間ほどで帰宅するなり、ひとことこう言った。

「まるで現場近くは『核の冬』だよ」

わが家の通りから四ブロック先のワース・ストリート以南は、燃えつづけるトレード・センターまで、ずつと真つ暗闇。通りにも建物にも、あたり一面、白い灰が積もって、クルマも人通りもない、恐ろしいほどの静寂に包まれていたという。現実離れたサイエンス・フィクションの世界を見るようで、核によって誰もいなくなるとこんな感じだろうか、と考えた。さらに歩きながら、まだ電燈のなかった十九世紀のニューヨークも思い描いたという。唯一目にしたのは、作業中の電気や電話会社のクルマだった。チャーチ・ストリートにはトレード・センター方向を向いて、トラックがずらりと並んでいたという。明日から始まる作業に備えているのだろうか。

*報復のためには手段も選ばない

その暗闇のチャーチ・ストリートを下り、一四九番地の前のアパートにも足を

向けたという。もちろん、一階の店は全部扉を固く閉じ、アパートのなかから灯りは見えなかった。

「まだあのアパートに住んでいたら、電気もガスも水道もなくなつて、避難するしかなかったわね」

わたしはため息をつきながら、こう言った。

「ほこりもひどいだろう。この灰と粉塵が体に良いわけはない。マスクを持っていつて良かったよ」

数週間前、わたしは何を思ったか、突然、浴室のペンキ塗りをした。その時にマスクを買っておいたのだった。

「こんな時にマスクが役に立つとは思わなかったけれど、何だかすべて幸運の女神に助けられているような気がするわ」

二年前、このロフトに移る時のちよつとしたいきさつを思い起こしながら、わたしはこう口にした。チャーチ・ストリート一四九番地付近が気に入ったわたしたちは、同じ地域のロフトを購入しようと考えていた。電話番号も変える必要がなく、同じチャーチ・ストリート郵便局の私書箱が使えるところと思つたのである。それまでに何回も引越しをしているため、これ以上、住所変更通知を出すのは控えたかった。数カ月にわたり、近くのロフトを何軒も見回したが、気に入った物件が見つからなかった。

ある日、少し北だけと言つて不動産屋が薦めてくれたのが、現在のロフトだった。アートディーラーが自宅と兼用で使つていたもので、古い建物の四階、天井も高く、広さも十分、わたしたちには理想的な住まいだった。しかし、問題は同じ電話番号が使えないことだった。この時、ワース・ストリートを境に、電話も電気も違う区域になることを知つて、呪いたい気分だった。さんざん迷つた末、ここに住むことに決めたのである。

階下から物音がする。三階のスーザンとジョンが戻つたに違いない。

あり合わせの簡単な夕食を済ませてから、ベッドに入ったが、眠れない。南タワーが爆発して襲ってくる瞬間が噂の奥に焼きついている。あのブルーの空に舞い上がる巨大な雲のような煙、きらきら光る物体、「ゴー！　ゴー！　ゴー！」という警官の声、あの時の戦慄と恐怖。寝返りを打つとこんどは、ニュージャーザー側からまわり込んできて、南タワーに突っ込んでいくジェット機、爆発、オレンジ色の巨大な炎がちらつく。疲れていた。それも、深い奈落に引き摺り下ろされるような重い疲労を感じるのに、頭のどこかの神経がぴんと立ち上がったまま、わたしを眠らせてくれない。ピートはぐつすり休んでいた。どうして眠れるのだろうか。

仕方なく起きて、リビングルームへ移り、テレビをつけた。二十四時間放送でニュースを流している。これではとても休めない。わたしは自分の神経を休ませ

るためにも、もう一度、Eメールを出すことにした。「ウォー・ゾーンからの速報3」である。

「9月12日2・20AM

From War Zone3

速報3

WTCの近くではまだ火災が起こっていて、夜空を赤く染め、大きな煙が東の方向へ向かっているようです。わたしの住む通りからは、火災も見えないし、灰も残骸も降ってきませんが、四ブロック先のワース・ストリート以南は、電気も消え、灰と残骸で埋まり、まるで「核の冬」の様相を呈しています。

この最悪のテロに対し、ニューヨークの対応は物凄いものでした。さすがにテロ対策の行き届いた街だと思わせます。現在、ニューヨーク市警の警官七十八名が行方不明、また消防士二百五十名以上が死亡した様子。本当に最悪です。

ジョージ・ブッシュが大統領になったとき、父ブッシュの「湾岸戦争」のような「戦争」が起こるに違いないと予想したのですが、当たってしまったようです。現在、オサマ・ビンラディンの犯行であると九十パーセント決めたようです。報復のためには手段を選ばないという姿勢を明確にしました。ということは、原爆も辞さないということです」

3時近くなつたが、まだ眠れない。十一日を境にすべてが変わってしまった。それまでの平穏な日々には戻れなくなつた。これからどんな恐ろしい時代が始まるのだろうか。さつき、米国の国防長官が、報復のためには手段も選ばない、と発言していた。世界一の軍事力を誇るこの国は、爆撃やミサイルばかりでなく、核の使用も考えているのだ。テロリストはさらなる報復のためにサリンや生物兵器を使うかもしれない。コレラ菌、チフス菌、パラチフス菌、腸チフス菌、発疹チフス菌、ペスト菌、赤痢菌、炭疽菌、流行性出血熱ウイルス、結核菌、破傷風菌、ガス壊疽菌、ブルセラ菌……わたしは思い出せる限りのあらゆる生物兵器をあげてみた。最悪の事態に備え、ガスマスクを買う必要がある。それでもすべて防げるわけではない。たくさんの人が殺されるだろう。そして、燃えつづけるトリード・センターのあの高熱のなかで、いまこの瞬間にも、生を絶たれる人が何人もいるのかもしれない。新しい戦争の幕はもう上がったのだ。